

クラン・コー遺跡調査

—中世カンボジア墓葬遺跡の調査—

1 クラン・コー遺跡の概要

クラン・コー遺跡はカンボジア王国コンボン・チュナン州に位置し、ポスト・アンコール期の王都の1つであるロンヴェックより北西へ約15kmの地域にある。当遺跡は村人による盗掘問題を契機として発見された。奈良文化財研究所とカンボジア文化芸術省は2010年度より文化庁伝統文化課所管、文化遺産国際貢献事業（文化遺産国際協力拠点交流事業）、「カンボジア・ウドン遺跡及びロンヴェック遺跡等の保存に関する拠点交流事業」の一環としてクラン・コー遺跡の調査をおこなっている。当事業ではクラン・コー村に広がる遺跡の実態把握、村人に対する文化財理解、ならびに若手考古学研究者の育成の3つの観点から調査を遂行している。現在までに4次にわたる調査をおこなったが、本稿では2011年7月におこなった第3次調査の成果と表面採集遺物を中心にして詳述する。

2 調査の概要

遺跡の全体像把握のため、最初にクラン・コー村内の踏査をおこない、遺物の出土地点をGPSデータで記録することに努めた。踏査の結果、村内には地上に目立った遺構の存在は認められなかったが、東西約3.5km、南北約1kmの範囲内に8ヵ所以上の遺物出土地点が点在することが判明した。遺物分布域が広範囲に及ぶことから、調査では遺物出土地点の中でも比較的多くの遺物を発見した地点を選定し、2次にわたるレーダー探査調査をおこなった。そのうち、良好な反応がある地点を選定し、発掘調査区を設定した。このうち、第3次発掘調査で未盗掘の墓葬1基を検出することができた。

3 第3次発掘調査検出遺構と遺物

墓 壙 第3次調査で設定した4m×2mのトレンチAでは、地表面より約0.7mの深さにおいて墓葬1基が未盗掘の状態で見出された。規模は長軸2.66m、短軸1.20mで、南南東—北北西の方位を示す。墓坑内からは長軸1.64m、短軸0.45mの木棺痕跡が確認されたため、木棺



図13 第3次調査検出墓葬

墓と推定された。人骨は検出されなかったが、副葬品の配置状況からみて頭位は南東方向であったと考えられる。

遺物検出状況 当墓葬からは多様な副葬品が発出された。頭部推定位置の左右それぞれに亜鉛を含む銅合金の耳飾が1個体ずつ配され、頭部から頸部推定位置周辺には青色と白色のガラス製小玉が散乱した状態で合計118点が出土した。頭部推定位置の南東側には2個体の在地系土師質丸底甕が並べられ、足元にはそれらよりひとまわり大きな在地系土師質丸底甕1個体が配されていた。両腕推定位置の外側には鉄製小刀が1個体ずつ配置されていた。西側からは輸入陶磁器が集中して検出され、すべて青磁製品であった。確認されたのは、中国青磁輪花皿1点、タイ・シーサッチャナライ窯青磁碗1点、・盤1点・鉢1点であったが、完形で出土したのは中国青磁輪花皿1点のみである。その他は破片の状態異なる位置から検出され、復元作業ののちほぼ完形に復元することができた。盗掘を受けている様子も見受けられなかったことから、埋葬する時点で陶磁器を割った状態で埋納したものと推測される。これらの輸入陶磁器の年代観は15世紀中頃から後半に比定できる。

学校地点検出の墓葬の被葬者は、墓壙規模からみて成人1名であったと考えられる。人骨が残存していなかったため男女の別は不明であるが、副葬品の多用さから見ても、ある程度の上層階級にあった人物であると推測される。人骨が遺存していない理由として現段階では2通り考えられる。1点目に遺体が土壌中に分解された可能性と、2点目は再埋葬のため遺体のみ取り上げられ、副葬品を再配置して埋め戻した可能性である。

4 表面採集遺物

上述の墓葬から出土した輸入陶磁器は15世紀中ごろから後半にかけての青磁製品のみであったが、表面採集遺

物や村人採集遺物には多様な製品が含まれると同時に年代幅が認められた。

表面採集遺物・村人採集遺物には多くの輸入陶磁器が含まれる。このうち、中国・徳化窯系白磁合子、龍泉窯系青磁皿、甬田窯系青磁盤、広東系褐釉四耳壺などの一群は、14世代に比定される。一方、宝相華唐草文碗や梅花文碗などの景德鎮窯産明青花碗、タイ・シーサッチャナライ窯青磁盤・碗・鉢、タイ北部ないしミャンマー青磁碗、中部ベトナム・ビンディン窯産青磁碗などの一群に関しては15世紀中葉～16世紀前葉に位置づけられるものである。また現在までのところ輸入陶磁器においては14世紀以前に位置づけられるものと、17世紀以降に及ぶものを確認できていない。

輸入陶磁器以外にも在地系土器やクメール黒褐釉四耳壺なども多く確認している。従来のクメール陶器研究ではアンコール王朝の衰退とともにクメール陶器の生産も衰退したと考えられていた。しかし14世紀～16世紀前葉を中心とする当遺跡から採集されたクメール黒褐釉四耳壺の存在によって、クメール陶器生産年代を再考する必要性がでてきたといえよう。

村人採集遺物には陶磁器以外にも青銅製指輪、えんじ色・黄色などのガラス製小玉、鉄製小刀などが確認されている。

5 考 察

出土陶磁器の年代観 クラン・コー遺跡の発掘調査では未盗掘の墓葬1基を良好な状態で検出することができた。当該期のカンボジアにおいては初の墓葬検出例であり、まとまった量の遺物を一括性が高い状態で確認できる重要な事例であるといえる。

表面採集遺物、村人採集遺物で確認された徳化窯系白磁合子など14世紀代の陶磁器は、アンコール遺跡群内でもしばしば確認され、当研究所が調査を進めている西トップ遺跡からも出土している。アンコール王朝末期にあたるこの時期に、まとまった量の輸入陶磁器を入手しえた勢力が、アンコール地域以外に存在していたことを示す新たな手掛かりとなる。

一方、墓葬出土遺物や表面採集遺物にみられる景德鎮窯産明青花、シーサッチャナライ青磁、ビンディン青磁などの15世紀中葉～16世紀前葉の資料に関しては、カ

ンボジア国内での先行調査が極めて乏しいこともあり、出土事例の少ない遺物群であるといえる。当該期はタイやベトナムをはじめとした東南アジア産陶磁器が貿易品として多く流通しはじめる時代にあたる。クラン・コー遺跡で確認された東南アジア産陶磁器も当時貿易品として流通していた代表的な陶磁器であるといえる。またこれらの輸入陶磁器とともに在地系土師質丸底甕やクメール黒褐釉陶器が出土したことにより、今後在地系土器・クメール陶器編年研究の重要な資料となりうる。

クラン・コー遺跡の位置づけ 当遺跡では14世紀～16世紀を中心とした輸入陶磁器群を確認した。当該期はアンコール期末期からポスト・アンコール期への移行期にあたり、当地域にまとまった量の輸入陶磁器を入手しうる権力をもった勢力が存在していたことが推定される。

アンコール王朝は1431年にシャム勢力の攻撃を受け、陥落したといわれる。その後王都はスレイ・サントーのバサン、プノンペンなど転々としたのち、1529年頃にトンレサップ川西岸地域のロンヴェックに遷都された。しかし、王都ロンヴェックも16世紀末にシャム軍の数次にわたる侵攻を受けて陥落したという。

クラン・コー遺跡は王都ロンヴェックから15kmほどの距離に位置していること、また17世紀以降に比定される遺物が出土しないことから、王都ロンヴェックの盛衰に関わった勢力との関係性を考慮する必要があると考えられる。様々な可能性を念頭に置きながら、今後クラン・コー遺跡、ロンヴェックにおいてさらなる調査を続ける予定である。
(佐藤由似)



図14 クラン・コー遺跡表面採集遺物